

「同和はこわい考」という著者は、岐阜大の藤田教授のものである。

はじめのうちは、運動に深くかわりのある人という評価もあつて、やんわり批判をするもの、または、やや迎合的な批評をするものが多かった。

現に広島県同和教育研究協議会においても、この著作の販売に協力してはくらくらいである。

しかし、部落解放運動の歴史が教えるように、社会的な緊張が強まってくると、さまざまな意見が、部落解放運動とは、似て非なる論理として、頭をもたげてくる。

米騒動から水平社創立に至る時代には、被差別部落民が腹を立てるのは当然だと、一応の腹歩を示したようなポーズをとりつつ、政府と国民の協力

によつて、われわれに、同情あわれみをかけねばならないという主張がなされた。悲しいことには、差別を受けるものの中にも、この思想に毒されるものが、いたということである。

大政翼賛会の時代には、堂々と、部落民も「天皇の赤子だから」と、部落解放運動を必要とするものも出てきた。

これは、表向きは、戦時の向きの平等を説かねば、戦時の「総動員体制」を徹底させることはできないとした支配階級の、意図をうまく逆用しようとするものも含まれていた。

しかし、はかなくも、この思ひは、天皇制権力、帝国主義勢力によつて、さらにまた逆にう

# 主張

## 『同和はこわい考』の差別性について

まくくみ込まれることになった。緊張感をともなう時期には、このような、いかにも発想の転換を提唱しているかの如き、主張がなされてくる。

客観的には、部落解放運動を真正面からおしすすめようとする気概に欠け、日和見主義におちいった姿である。そして、そ

のいう糾弾批判はあたらないが、やはり「糾弾」にはおかしところがある。地対協と部落解放同盟との間に、割って入り、公正な判断をしているかのよう

なポーズをとっている。しかし、そこに例示されているものは、ラジカルな一青年が狭山問題で腹を立てて、暴力を

をもつて、部落解放運動全般が十把一絡で判断されたのでは、迷惑の上もないことである。地対協との相違点があるとしても、本質的には、「同和

はこわい考」が、同じ立場に立っている」と主張する所以である。このドグマを正当化するため藤田教授は「両側から超える」という金時鐘さんの言葉を

被差別者に対して、あせよ、こうせよと、自分のことを構に上げた議論ではないのである。地対協は、「両側から超える」という言葉は使っていない。しかし、藤田教授によつて、この言葉を花小化して使うとき、その思ひは、地対協と全く一致するのである。

「朝日ジャーナル」などが取り上げて、藤田教授にものを言わせ、部落解放同盟の現役の活動家には見向きもしない、一方的なマスコミの態度も、世の中の反動化をひしひしと身を感じるといふところだ。

のことは、見事に差別主義者らによつて利用されてきた。ときあたかも、地対協「部会報告」に端を発して、いよいよ権力が、前面におどり出てきて、部落解放運動を弾圧しようとする部をむいてくる時期である。「同和はこわい考」は、「部会報告」

ふるったというものである。果して、その暴力をふるった青年が、部落解放運動の本流を担当している者であったのだろうか。藤田敏一教授らが、若き日につき合っていた仲間というか、グループの中のできごとではなかつたのであろうか。この一事

が、この言葉を引きあいに出す狙いである。人びとに耳ざわりよい主張である。金時鐘さんが在日朝鮮・韓国の一員として、自らのやらねばならぬことがあるとして、「両側」の一方を規定しているのが、相手に対して、いわんや、

の長に認められるということが、地対協路線ではないのか。